

伊地知氏は垂水を治めること第9代重興（1528～1580）に至って全盛期を迎えました。伊地知氏は勢力を大隅に伸ばしつつあった島津氏との戦いに対して、大隅の豪族、祢寝氏や肝付氏と提携し対抗し、早崎城や入船城（牛根城）において戦いましたが、ついに天正2年（1574）田上、高城、新城等5か所を差し出し降伏しました。



島津墓地

その後、藩政時代に入り、慶長4年（1598）垂水島津家初代・忠将の所領となつてから明治2年（1869）まで協和の地も垂水島津家15代、約270年にわたる支配が続きました。

## 2. 桜島の大爆発

錦江湾にそびえる桜島は、有史以前から大きな爆発を起こし、そのたびに噴出する熔岩や火山灰は周辺の人々に多大な被害を及ぼしてきました。

特に桜島の近くに位置する協和地区は桜島の活動と密接に結びついています。そのうち、大爆発の大きなものは安永8年（1779）と、大正3年（1914）1月12日の大爆発が特筆されます。

安永の大爆発については約60年後に垂水島津家の家臣、伊地知季虔が著した「桜島燃き」に海瀉周辺、特に小浜集落の被害の様子や復旧に向かう人々の奮闘の様子が記されています。さらに、噴火などで亡くなった人々の霊を弔って建てられた石碑「櫻島焼亡塔」がいまも菅原神社の境内に残されています。



桜島噴火

大正の大噴火の大量の熔岩流により桜島と大隅半島とは現在の桜島口で地続きになりました。当時の噴火前後のことは、様々な記録や写真が残されており、噴火当時のすさまじさをいまに感じさせてくれます。

この時、桜島にあった瀬戸村や脇村などの人々を救い出すために落下